

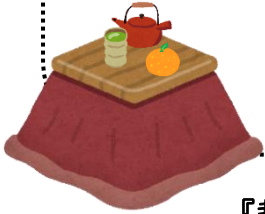
今月の PICK UP

『野生生物は「やさしさ」だけで守れるか?』 朝日新聞取材チーム／著

岩波書店 480.97



この本の著者は「住宅街にシカが現れた」「河口付近にクジラが迷い込んだ」など、野生生物の捕獲、保護、駆除について取材を続けてきた三人の新聞記者たちです。野生生物の扱いについて議論が分かれる中、著者たちは、悩みながら命と向き合う野生動物に関わる人々の声を取り上げ、そこから見えてくる現状と課題を記しています。これらは決して簡単には解決できない複雑な問題であり、立場が違えば意見や解決方法も違ってくることでしょう。本書は何が正解かを示すのではなく、私たちに生物の共生について考えるきっかけを与えてくれています。平易な文章でまとめられているので、幅広い年齢の方に読んでいただける1冊です。



『裁判員17人の声』 牧野 茂(他)／編著 旬報社 327.6



裁判員制度が始まって15年が経ちますが、内実をよく知らない人が多いのではないのでしょうか。本書は裁判員を経験した17人に、裁判員に選ばれたときから任務を終えるまでを詳細にインタビューしたものです。裁判前の不安や意気込み、裁判後の達成感や課題に感じたことなどが率直に語られていて、その人の個性や場の雰囲気が感じられる本となっています。

司書の
おすすめ



『中世修道院の庭から』 ミシェル・ボーヴェ／著 グラフィック社 622.3

ヨーロッパに古くから存在した修道院の庭では、様々な植物が育てられていたといえます。しかし長い歴史における戦争や疾病などにより、そのころの姿のままに残っている庭はなくなってしまいました。現在あるものは、近代になり、いにしへの絵画などから復元された庭だそうです。

当時の庭はどのようなデザインで、どのような植物が植えられていたのでしょうか。多くの図版や写真による解説が楽しく、また、現代の庭造りのヒントも見つけられそうです。



『紅雲町ものがたり』 吉永 南央／著 文藝春秋 913.6



本書の主人公は、コーヒー豆と和食器を扱い、コーヒーの試飲もできる「小蔵屋」の店主、杉浦草。客や周囲の人たちから“お草さん”と呼ばれ慕われています。彼らから家族間の問題など相談を受けると、各々の秘めた事情や過去にも思いを巡らしながら解決に向けて行動を起こします。

時に、危険を顧みない大胆な行動にハラハラしますが、機転が利き、情に厚い草の人柄が魅力的で、店を訪れたいくなるでしょう。連作短編集でシリーズもあります。

『チョコレートで読み解く世界史』 増田 ユリヤ／著 ポプラ社 209

現代では手軽に楽しめるチョコレートですが、かつては「神々の食べ物」としてあがめられ、通貨や高級薬として利用されていました。本書では、ヨーロッパにおける宗教戦争や弾圧を背景に全世界に広まったチョコレートの歴史が書かれています。口の中でとろけるチョコレートの秘密をぜひ読んでみてください。

